



ひょうたん島の沖で見つけたコケムシの顕微鏡写真。この健気に生きている美しい姿を見ると、調査の疲れも吹き飛んでしまいます。



第11回

⑪ コケムシに魅せられて

大槌の海の生き物と聞いて真っ先に思い浮かぶものは何ですか？私の場合、それは「コケムシ」です。ホタテの殻や漁網のロープなどに付いたコケのような生き物です。しかし、あまりに地味すぎて、皆さんイメージすることすら難しいかもしれません。そこで今回の『海の勉強室』では、私がどのようにしてこの変な生き物と出会い、魅了され、研究するに至ったのかをご紹介します。と思います。

池に沈む謎のぶよぶよ

私が初めてソレと出会ったのは高校生のときです。清流の寶石・カワセミの撮影に挑んでいた私は、足下の水中に大きなボールのようなものを見つけました。拾い上げてみると、ソレは異様な臭いを放つぶよぶよとした寒天質の塊でした。どう見ても「玉石」ではないソレを高校に持ち帰った私は、「気色悪い！」という友人たちの非難も気にせず、夢中でその正体を図鑑で調べました。しかし、なんだかよくわかりません。そこで、日本最大の湖である琵琶湖の研究所に写真や実物を送り、ようやくソレがオオマリコケムシという動物だと知ったのです。私を持ち帰った大きなぶよぶよは、1ミリほどの小さな個虫（一匹）が無数に集まった群体（コロニー）だったのです。あらためて新鮮なコケムシを採集して顕微鏡で観察

すると、ガラス細工のように美しい曲線と透き通った体をもつ生き物が、翼のような触手を大きく広げているではありませんか！それはまるでミククロのお花畑にいるようでした。「臭いぶよぶよ」からは想像できない可憐な姿に、私はすっかりコケムシの虜となったのです。

コケムシをもっと知りたい！

コケムシは4億5千万年以上前から地球上に存在し、世界中の海におよそ6000種いるとされています。しかも、海のコケムシは群体にも色々な形があつて、冒頭で紹介したコケのようなものもいれば、サンゴのような種類も存在します。コケムシの群体はすべて、もともと一匹の個虫から分裂したクローンで、個虫間で栄養のやりとりができます。このため、外敵を追い払ったり、群体を支えるために働く個虫が現れ、群体全体としての役割分担が出来上がるのです。これほど美しく、興味深いにもかかわらず、それまでコケムシが人々の興味を引く事はありませんでした。こうして私は、世界で数人しかいないコケムシ研究者となり、新種に名前を付けて進化を論じたり（分類学）、どのように成長するのかを調べたり（発生学）、他の生物との関係性を調べたり（生態学）、コケムシに関することは何でも研究するようになったのです。

身近に潜む宝探し

かつて2種類しか報告のなかった大槌で、私はこれまでに50種以上のコケムシを採集しました。この中には、まだ名前すら付いていない種も含まれているはず。大槌

湾口部の海底には、サンゴに似た大きなコケムシが沢山生息しています。身近な蓬萊島（ひょうたん島）の近くにだつて、まるで草原のように数種のコケムシが繁茂する光景が広がっています。こんな光景は世界的にもなかなか見ることができません。大槌の海は今、世界で最もコケムシの研究の進んだ場所の一つと言えます。

海には、コケムシのように地味でなかなか気づいてもらえない生き物たちが沢山います。もしかすると、大槌の海から世界へと広がる研究の「原石」は、意外と身近なところにも転がっているのかもしれない。いよいよ温かくなってくる季節、みなさんも海に出たときは、普段とは少し違った小さな生き物たちも観察してみてくださいはいかですか？



大槌人 大槌 雅人
 1982年 生まれ。生物学。潜水調査から国内外の池や海に棲むコケムシの多様性を研究している。現在は節足動物やシャミシの分類も手掛ける。

洋での調査航海、博物館での標本調査を通して、日本各地の池や海に棲むコケムシの多様性を研究している。現在は節足動物やシャミシの分類も手掛ける。

大槌文化ハウス（中央公民館2階）で開催されている「東大教室@大槌」において、東京大学大気海洋研究所国際沿岸海洋研究センターの研究者が今後定期的に講演を行います。初回は河村知彦センター長による「海の教室」震災後の大槌湾の生き物たち。詳細は本号（9ページ）をご覧ください。